

# ダムの排砂技術 (潜行吸引式排砂管のご紹介)

特許5305439号 特許第5599069号  
水中堆積物流送用の吸引パイプ、水中堆積物の流送装置、  
及びそれを用いた水中堆積物の流送方法

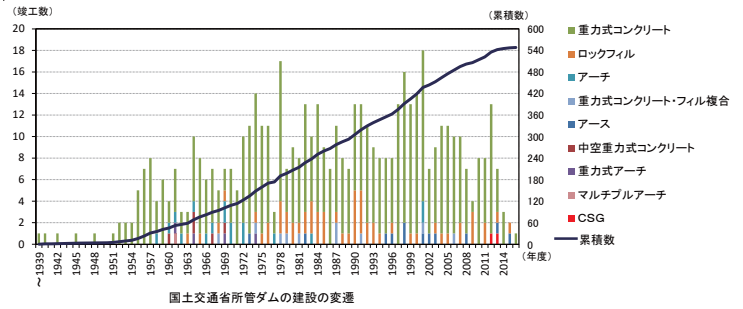


国立研究開発法人 土木研究所  
水工研究グループ 水理チーム  
主任研究員 宮川 仁



## 我が国のダム

- 日本のダム数 : 約2,600  
(堤高15m以上、砂防ダムを除く)
- 国土交通省所管ダム数 : 558  
(平成28年度、直轄+水機構+都道府県)
- 国交省直轄+水資源機構ダム数 : 123



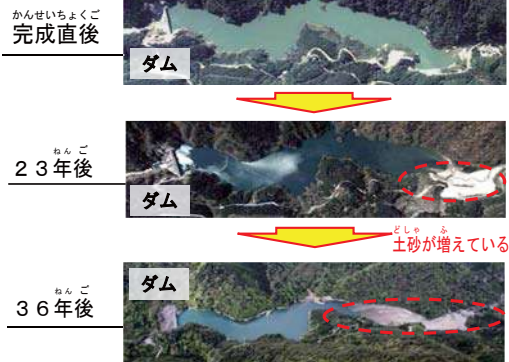
## ダムの機能と特徴

- ダムは河川に横断して建設される大規模構造物
- 大量の水が貯留できるので、洪水時や渇水時の国民生活への影響を低減できる極めて重要な社会的資産
- ダムの堤体は、適切に施工、維持管理されているものであれば、半永久的に健全であることが期待でき、既設ダムを長期にわたって有効に、かつ持続的に活用を図ることが重要である。

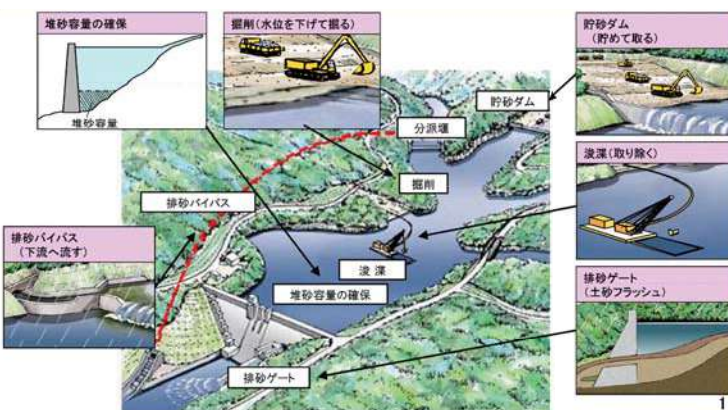


## ダムの特徴

- ダムにより土砂は水とともに捕捉、貯水池内に蓄積、ダムの機能は徐々に低減。  
→堆砂対策は長期間にわたって貯水池を活用する上で克服すべき重要な課題。  
→ダム下流河床の粗粒化など河床環境への影響も懸念。



## 主な堆砂対策



国土交通省資料



## 技術開発の背景・目的

- 実用化されている主な堆砂対策技術(掘削・波濤、土砂パイパス、排砂設備)は、  
・設備等の建設及び維持管理に多額の費用を要する  
・貯水池運用の制約を受ける  
など適用条件が限定。



土木研究所では、貯水池運用に影響を与えることなく、低コストで貯水池から排砂することを目標に、ダム上下流の水位差のエネルギーを利用して土砂を吸引、輸送する「潜行吸引式排砂管」を開発している。

## 潜行吸引式排砂管の概要

- 土木研究所単独で特許5305439号、5599069号を取得
- 現在の改良中の諸元

管を折り曲げたようなU字形状、一方が取水口、他方を吐口とする。  
 材質：吸引部は主に鉄製、他はフレキシブル管（サクシオンホース）  
 形状：吸引部底部に不透水性シート（ゴム）と管径の半分の吸引口を7つ配置。取水口側のサクシオンホースにも吸引口を5個設置。

下面平面図

断面図

## 潜行吸引式排砂管の概要

φ100mm潜行吸引式排砂管 (吸引口径50mm: 裏返した状況)

## 潜行吸引式排砂管による吸引イメージ

- 潜行吸引式排砂管を用いて、以下のような土砂吸引を考えている。
- 単純な構造、操作も簡単のため、ダム管理者自らでも操作は可能と考えている。

- ①平水時に装置を堆砂の表面に設置し、
- ②洪水時に、装置下流\*のバルブを開くことにより、堆砂を吸引・放流する。堆砂はすり鉢状に崩れながら吸引され、吸引部は堆砂に潜行していく。吸引部が底面に達した後も上流部の管底面に設置された穴等から土砂を吸引し続け、
- ③最終的には再び堆砂の表面に吸引部が現れる。

①土砂吸引前

②土砂吸引中

③土砂吸引後

\*装置下流は堤体下流の他に、土砂輸送トンネルも考えられる

## 室内実験の概要

- 国土技術政策総合研究所の室内実験場約230m<sup>2</sup>を借用し、幅7.5m、奥行き7.5m、高さ3.5mの水槽を設置。水位差が最大約3mの実験が可能。

実験時の状況

## 室内実験条件

①水槽内に0.1~2mmの混合砂を敷き詰め、排砂管を堆砂表面に設置

②水槽を満水とし、排砂管をクレーンで吊り下げ

水位差2.4m  
 水槽3.5m  
 水位3.35m  
 土砂2m  
 7.5m  
 バルブ  
 給水 最大約170L/s  
 越流堰

③水槽の水位を維持するための大量の水を要することから循環式で給水を行い、バルブを開けて排砂を行う。

## 管径300mm潜行吸引式排砂管 (吸引口径150mm)


吸引部 重さ約700kg

縦板 (厚さ6.0mm)  
 ゴムシート (厚さ8mm)  
 重り (12枚×4箇所)  
 吊り上げフック  
 縦板 (厚さ6.0mm)  
 ゴムシート (厚さ8mm)  
 縦板 (厚さ6.0mm)




## 管径300mm 室内実験結果

土砂吸引前



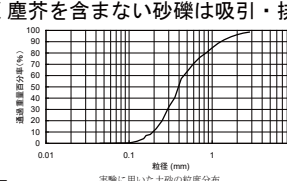
土砂吸引後



- 排砂管径300mmの模型を用い、粘着性がなく塵芥を含まない砂礫は吸引・排砂が十分可能であることを確認。
- 約5時間で約50m<sup>3</sup>の土砂を排砂

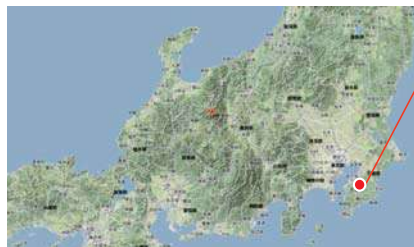
↓

実用化に向け、適用を想定する現場での  
実際の堆砂での現地実験、実証試験が必要




実験に用いた土砂の粒度分布


## 管径300mm 現地実験場所



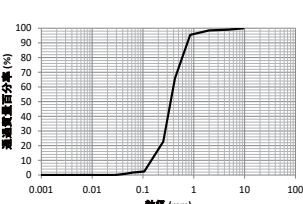
千葉県市原市養老川水系養老川  
高滝ダム貯水池内日竹貯砂ダム



貯砂ダム全景(水位差約1.6m確保可能)




貯砂ダム上流の河床の状況



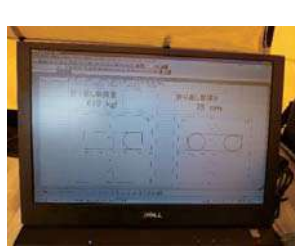
貯砂ダム上流の河床の粒径

## 管径300mm 現地実験状況



無線LANによるデータ送信  
ケーブルによるデータ伝送(市前置、和直伝達)  
ケーブルによるデータ伝送(管内流速)  
ケーブルによるデータ伝送(管内圧力)

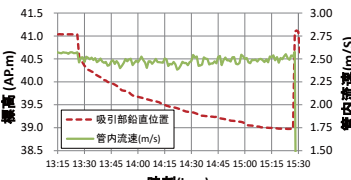
実験時の状況



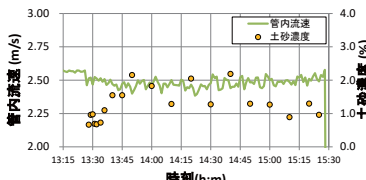
リアルタイムデータのPCへの集約

実用化に向け、水理量等のデータをリアルタイムに収集できるように自動システム化


## 管径300mm 現地実験結果



吸引部深度と管内流速の関係

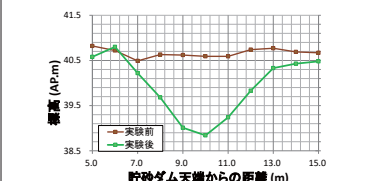


土砂濃度と管内流速の関係

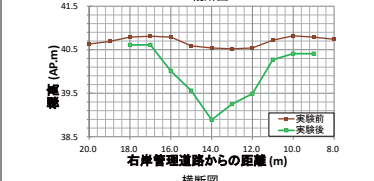


土砂濃度だけは直接採取により計測



## 管径300mm 現地実験結果



貯砂ダム天端からの距離 (m)  
縦断面

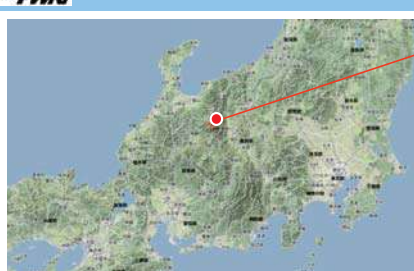


右岸管理道路からの距離 (m)  
横断面


連続2時間で約21m<sup>3</sup>の土砂を排出。  
最大径150mm (吸引孔径150mm)  
その他有用な水理量の取得

## 管径100mm 現地実証試験場所




長野県大町市  
東京電力ホールディングス(株)  
大町新堰発電所 水槽兼沈砂池

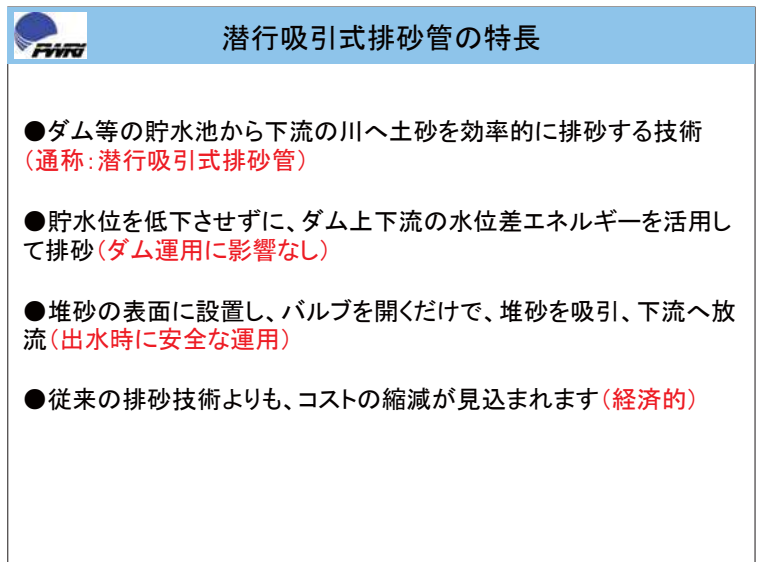
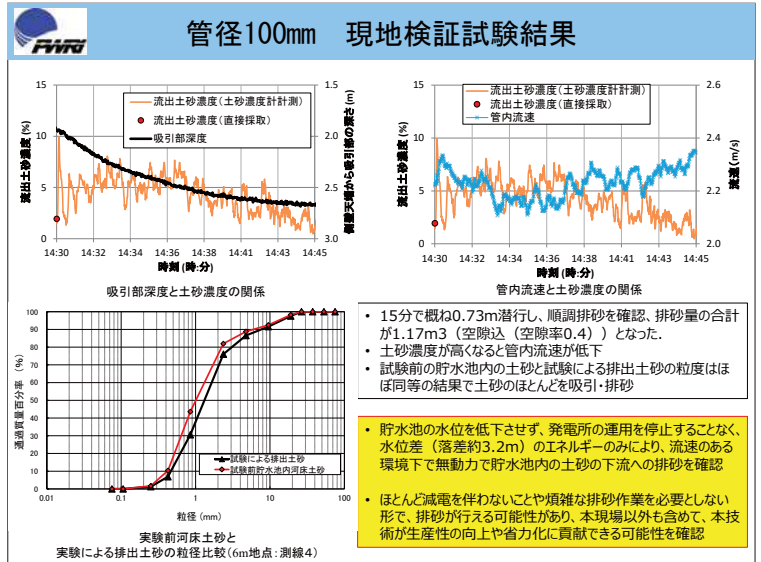
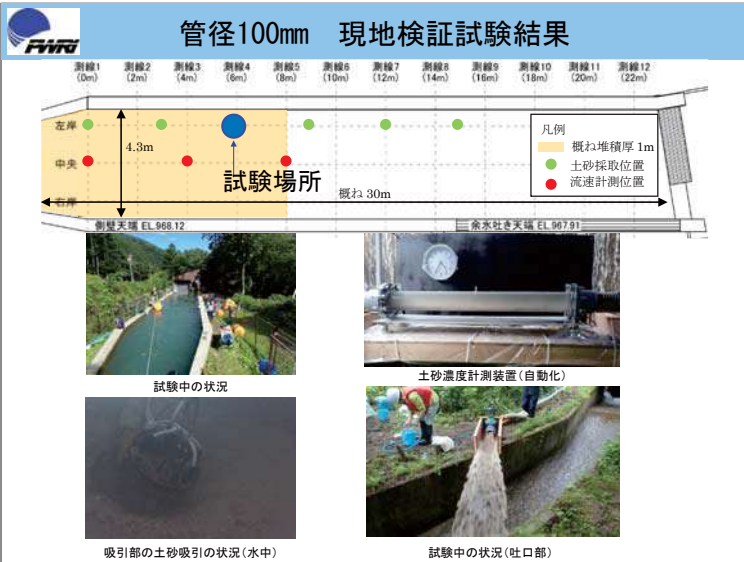
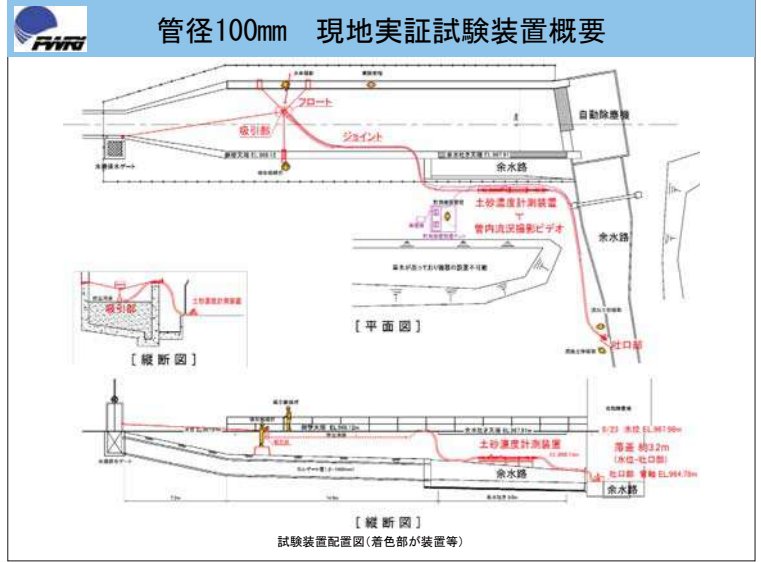
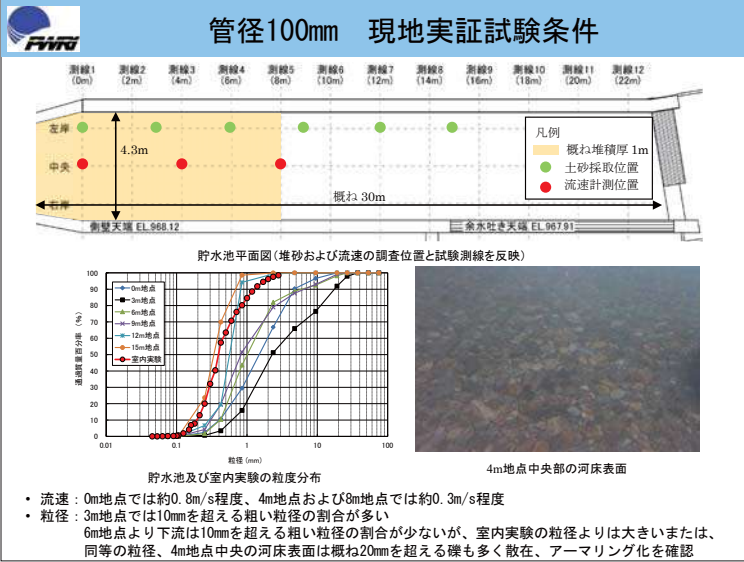
- 発電および農業用水の取水運用がされている長さ約30m、幅約4m、深さ約3mの取水槽兼沈砂池を小規模貯水池とみなし、その堆砂について、施設の運用を停止することなく流速のある環境下で排砂管を運用し貯水池外へ無動力で排出する実証試験を実施



水槽兼沈砂池(運用中)

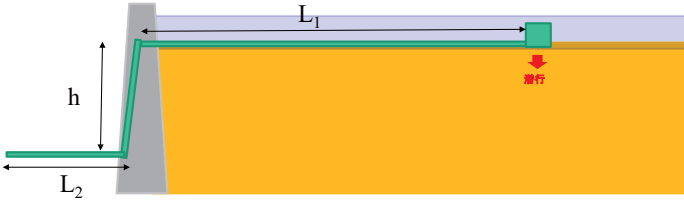


水槽兼沈砂池(排砂時)



## これまでの試験実績

管径	吸引口径	場所	落差 (h)	管距離 (L1+L2+h)	流速 (清水)	排砂時間	排砂量 (空隙込)	排砂可能粒径	時間当たり排砂量	排砂時流速 (概ね)	土砂濃度 (平均)
100mm	50mm	室内	2.6m	約16m	2.8m/s	約4.5時間	約30m <sup>3</sup>	0.1mm~2mm	約6.7m <sup>3</sup> /h	2.5m/s	5.66%
		発電所沈砂池	3.2m	約36m	2.3m/s	15分	約1.2m <sup>3</sup>	0.1mm~50mm (長径80mm)	約4.8m <sup>3</sup> /h	2.2m/s	4.63%
200mm	100mm	穂高砂防観測所	3.3m	約13m	3.7m/s	78分	約17m <sup>3</sup>	0.1mm~長径38mm	約13m <sup>3</sup> /h	3.7m/s	1.92%
		高滝ダム貯砂ダム	1.6m	約18m	2.4m/s	15分	約5.5m <sup>3</sup>	0.1mm~100mm (長径140mm)	約22m <sup>3</sup> /h	2.3m/s	5.07%
300mm	150mm	室内	2.4m	約10m	2.4m/s	約5時間	約50m <sup>3</sup>	0.1mm~2mm	約10m <sup>3</sup> /h	2.3m/s	1.03%
		高滝ダム貯砂ダム	1.6m	約18m	2.6m/s	2時間	約21m <sup>3</sup>	0.1mm~150mm (長径180mm)	約10.5m <sup>3</sup> /h	2.5m/s	0.99%



## 想定される活用の場面、使用上の留意点

- 管径100mmは、持ち運びも容易で作業労力の軽減に貢献。ダムだけでなく、取水堰付近沈砂池の堆砂の掃除での活用
- 現在、適用可能な堆砂の状態や実用的な運用方法などについて現地等で実証確認中
- 対象土砂粒径(吸引性能に適用範囲がある。)
  - ・粘性土を含まない0.1mm以上から吸引口径までの大きさが対象。
  - ・吸引口径の半分程度の礫が卓越する場合は排砂効率が低下。
  - ・吸引口径よりも大きい粒径は吸引不能。
 このため、試用実験が必要です。
- 台船を必要としないため、平水時の排砂でもコスト面でメリットの可能性(濁水対策は別途必要)



## 利用等にあたって

まずは相談を!

現場条件と排砂管との適合に関する検討が必要なため、個々にご相談ください。(製作の費用はご負担願います。)

様々な現場での検証場所を募集中、特に、管径300mmの現地実証試験場所、試用試験のご相談を募集中。

(問い合わせ先)

土木研究所 水工研究グループ 水理チーム 宮川 仁

damsuiri@pwri.go.jp